文房清玩史考

中田勇次郎

書斎についてよくいわれることばに「明窓浄几」というのがある。これは明るい窓、清浄な机が書斎における理想的なすがたであることを象徴的にいいあらわしたものであるとおもう。宋代の詩人、蘇舜欽のことばに「筆硯紙墨、みな極めて精良なることこそ、おのずから足れ人生の一楽なれ」というのがあり、宋の欧陽脩の隋筆のなかに引用されている。

また、明代末葉の公安派の文学者として名高い袁中郎に「瓶史」といういけばなの趣味のためにあらわした本がある。そのなかに、いけばなを鑑賞するときの環境の条件をかきつらねた一節がある。それには、花のこころにかなう十四条として、

明窓、浄室、古鼎、宋硯、松涛、渓声、主人好事能詩、門僧解烹茶、薊州人送酒、座客工画。花卉盛開快心友臨門、手抄芸花書、夜深炉鳴、妻妾校花故実、

をかかげている。これはいけばなを鑑賞するには、このようなかずかずの条件がそろっていなければならないことを述べたものである。そして、そのなかにも、まず、明るい窓と清浄な室を第一の条件としてとりあげている。

中国においては書斎を中心にして文化が発展していった。この書斎のなかにいる人を、普通に文人ということばでよんでいる。この文人というものは、つねに清貧に甘んじて生活しているものであるから、このような理想的な環境はたやすくえられない。しかし、できるならばこのような条件を満すことのできる書斎をもって、そのような環境のなかからこそ、よい文化が生みだされるのであると考えているのである。

そこでまず、普通によくもちいられているこの「文人」ということばについて、その意味を究めておく必要がある。文人ということばは、中国の古代において、その当時の経典、たとえば書経とか詩経のなかに用いられている。書経の文侯之命に「追孝于前文人」とあり、伝に「以善使追孝於前文徳之人」、疏に「追行孝道於前世文徳之人」という。詩経の江漢に「告于文人」とあり、毛伝に「文人文徳之人也」、鄭箋に「告其

先祖諸侯有徳美見記者」、疏に「汝嘗受之以告祭於汝先祖有文徳人」と説いている。文徳の人といい、徳美あって記さるるものといい、いずれも学問徳行のすぐれた人物という意味に解している。そののち、漢代の終りから魏のころにかけてあらわされた文献のなかに用いられている二三の例を見ると、それには文人を文章家という意味に用いている。たとえば、魏文帝が「典論」という著述のなかで「論文」といって文章を論じた一節のなかに、「文人相軽んず」とか、「今の文人」云々というように用いているのは、あきらかにこの例である。これからのちは、文人といえば文章をよくする人とか、文学者という意味に用いられることが多くなるが、ただ、文章といい文学といっても、中国の古典文学の場合では、歴史や哲学思想や奏疏書啓など広い範囲の文章を包含しているので、いわゆる今日考えられるような文学という概念でとらえられるようなものではない。今日、文学といえば戯曲や小説のようなものがかなり主要な部分を占めるが、中国の古典においては、このようないわゆる通俗な文学はまだ十分発達していなかった。それゆえに、文章とか文学とかいうのは、このような古典としての意義をもつものであり、ある実際上の目的にともなって特有の文体を備えたものに限られている。普通に考えられるもっとも文学的な詩とか賦というものは、その一部分を占めているにすぎないのである。従って、文人といっても、いわゆる文学者を指すのでなく、智識人とか学者というのとほとんど変らない意味をもつものである。

唐代では進士の試験に及第した人を文人とよんでいることがあることが唐国史補に見える。宋代では器量人物、学問見識のすぐれたものを文人と称している例が、宋史、劉摯伝にのっている。これらはすべて学識のあるすぐれた人物のことを意味しているのである。中国でよくもちいる士大夫ということばは、知識人で官職についているものと将士と士族という三通りの意味に用いられ、一般には第一の知識人で官職についているものをさすことが多いが、文人というのも、実質的にはこのいみでの士大夫とほぼ近いものであると考えられる。

要するに文人ということばは、以上かかげたような古い時代からのいろいろな例について考えてみると、そのそれぞれについては多少意味や内容の異なるところはあるとしても、原則的には学識の備わった人物であることには、いずれの場合においても変りはないようである。

ところが、唐時代のころから、文人というものにまた新しい意味が起っくる。それについては、明の董其昌が、その著、画禅室随筆のなかに、「文人の画は王右丞から始まる」といって、いわゆる文人画の起原となる説を立てているのが注目される。王右丞すなわち唐の王維は、詩人として知られているが、その作品などを通してその生活を見ると、陝西藍田県の輞川（もうせん）に別業を構えて、その幽邃な景色を名勝二十境としてえ

がき、また詩友裴迪（はいてき）と唱和してその情趣を詠じている。董其昌がここに文人の画といったのは、ただ、単に詩文をよくする教養人というほどの意味で用いているものとおもうが、実際上、ここにあらわれた王維というのは、その生活内容や人がらからいえば、詩をつくったり、書をかき画をえがいたりすることができ、きわめて風雅な環境のなかにある教養人とでもいうべきものを意味する。董其昌はたまたま画の上からこれを述べたのであるが、画ばかりとは限らず、一般に文人とよぶのは、これかのちは、このような型の人物が主となって、ゆたかな文化を形成してゆくようになる。そういう意味では王維のような人物が、文人の一典型となるであろうとおもう。

唐代をへて宋代以後になると、次第にこのような意味における文人が多くあらわれてくる。宋代の初に、西湖のほとりに隠栖し、梅を植え鶴を飼うて、三十年城市に入ることがなかったという林逋（和靖）も、王維についでの典型的な文人といってよいであろう。

宋代になって天下は太平におさまり、庶民の文化が栄えるにともなって、いろいろな学問が勃興する。その間にあって文人学者たちは書斎を中心にしてこの学問文化の向上を来してゆく。宋人の多様な趣味性はやがて書斎のなかからうつくしい文芸や趣味生活が展開してゆくようになる。

文人学者の起居する書斎は古く文房とよばれ、この文房がその文化発生の揺籃となるのである。

そこでまた、この「文房」について、その意義を考えて見よう。元来この文房ということばは、ずっと古く六朝ごろからあることばである。すなわち、南史の江華伝に「任昉与華書云、比聞雍府妙選英才、文房之職、皆卿昆第」とあり、北史、柳慶伝に「時北雍州献白鹿、群臣欲賀、蘇綽謂慶曰、君職典文房、宜製此表」とある。これらの例では、文房は文翰を典掌する場所で、いわば文書課のようなところである。唐代になってからの例では、陸亀蒙の石筆架子賦に、「叨居談柄之列、辱在文房之裏」というときの文房というのは、文書を司る所よりも、書画を鑑賞する室の方に近い意味であろう。五代南唐の李煜が、その所蔵の書画に「建業文房之印」という印を鑑蔵のしるしとして用いている。これはあきらかに書画を所蔵し鑑賞する室を意味している。このころから文房というのはもとの文書を司る室から転じてこのような意味に用いられるようになったものとおもう。

宋初に出た書画の鑑蔵家として名高い蘇易簡の著書に「文房四譜」というのがある。もと「文房四宝譜」という名称であったらしいが、宋代の著録、たとえば直斎書録解題では文房四譜となっている。現在の刊本も文房四譜となっている。いずれにしてもこの場合の文房はすでに書斎

の意味になっている。そしてそのなかに四宝すなわち筆硯紙墨が設けられているから、それが書斎であることをさらにはっきり示している。文房四譜というときの文房は文房で用ひる道具、主として筆硯紙墨をさすことにもなり、さらにこの意味が具体的な器具を意味する。

宋の米芾（べいふつ）の画史に、「大年（趙氏）収得南唐集賢院御書印、用于文房書画者」とあるのなどは、文房が書画を鑑識するところであることをさらによく証明している。

このように宋代からのちになると、文人の起居する書斎は文房とよばれて、ここを中心として多種多様の趣味が展開されていったのである。それは書、画をはじめとして、金石碑帖、古銅器、筆、硯、紙、墨のいわゆる文房具から、座右の器玩、服飾、その他室内の諸施設など、また茶、花、香、園芸にいたるまで、文人生活のあらゆる方面にわたって、それぞれの趣味が発揮される。これはちょうどわが国の茶道が、茶を点てることを中心として、それがさらにひろく展開して、建築、庭園から書画、美術工芸そのほか生活面の広い分野にわたっているのとよく似ている。この点では文人趣味は茶道と、その形態において通ずるものをもっているということができるが、年代的には文人趣味の方が先行するものであり、また、これは文事を中心として学識のある士大夫階級の人々によって行われているので、性格の上ではかなり相違しているし、またその範囲もはるかに広く、従ってそのあらわれかたもなり異っている。

つぎに、文房具のなかのもっと重要なものであるところの、文房四宝、すなわち筆硯紙墨のそれぞれについて、まずその起源を考えてみることとしたい。

筆は西暦紀元前千数百年、殷時代の甲骨に刻まれた文字のなかに、筆を意味する聿という文字があり、これは手に丨を持った形で、丨は不律すなわち筆のことである。従ってこの文字は人間が手に筆をもっている形をうつしたいわゆる象形文字である。これによってこの時代に筆があったことが知られる。また甲骨文のなかには、まれに筆をもちいて書いたと推定される墨書したもの、また朱書したものがあり、この時代に筆の用いられていたことをさらにたしかめることができる。董作賓、慶祝蔡元培先生六十五歳論文集に墨書の例をあげている。また、朱書のある古玉がシヤンカンク、コレクションにあることが、梅原末治博士の論説に見える。（書道全集巻一）。

今、最古の筆の実物としては、一九五三年、長沙郊外の左家公山の戦国時代の墳墓から発見されたその時代の毛筆がある。長さ五寸五分、兎毫をもちいてつくられた毛筆である。一見して今日の毛筆とほとんど同一の形をしている。今まで筆といえば、礼記の曲礼に、「史載筆、士載

言」とあるなどによって、その実在することは知られていたが、俗説は秦の蒙恬将軍が発明したことになっていた。よって筆の異名を蒙恬将軍などともよんでいる。しかし、長沙からこの筆が発見されたので、その伝説も信じられなくなったわけである。上記の筆を長沙筆とよんでいる。それについで漢代の居延（カラホト）から発見された毛筆があり、またこの時代の実物の筆を見ることができるようになった。これを居延筆とよんでいる。（国学季刊三の一）。長沙筆とともにこの二種の筆が、古い時代の実物のすがたを示している。長沙筆の毛の材料が兎毫であることは、筆の毛に兎毫を用いることがすでに戦国にさかのぼるものであることを示している。

硯については、筆がある以上はこれに対応するような道具が当然あったことと考えなければならない。その実物としては、前漢のBC二〇二～8ADにいたる朝鮮の楽浪から、発掘されたものがある。これは粘板岩の長方形の石版を台の上にはめこんで、その台の下部は抽斗になり、刀筆などの筆写に必要な用具を容れるようになっている。上方の部分に小さい蓋つきの壺が一つ添えられている。この石板の上で膠をまぜて炭末をすりくだいて墨汁をつくるようにできているようである。また、後漢時代の末葉のころにあたる河北省望都の漢墓の壁面に人物が描かれている。それは記録係りで、坐っている前に、円形の石板と見られるものの下に台を設けて、足をとりつけられた形式の硯がある。その硯の上に、先のとがった円錐形の墨がまっすぐにのせられている。そのかたわらには水壺が一つ置かれている。これは記録係りの役人が、前に硯をおいて木簡に字を書こうとしている情景である。これを見ると、後世の硯や墨とはかなり形もことなっている。このときには硯や墨はまだ実質外形ともに、十分発達していなかったようにおもう。

またもう一つ、これも漢代の遺物といわれているものに、平たくて中心の凹んだ皿の上に、黒い粉末をすりくだいてこまかくするための小さな器をおいた形式のものが紹介されている。小さい石板と撮壓子より成っているものである。（楽浪出土）。これを見ても、漢代においては、墨はまだ炭素の粉末程度のもので、後世のように精製された立派な形式のものではなく、従って硯もそのような黒い粉末をすりくだいて墨の汁をつくるためのものであって、もちろん実用の範囲を出ないものであったと思われる。

硯は漢代の遺物によって、その起源が漢代より降るものではないことが確かめられる。筆写の必要性から考えても、硯またはそれの原始的な形式のものはもっと古くにさかのぼるのではなかろうか。

紙は甘粛省の居延地方から出土したものに、永平五年（九三）から同七年（九五）の年号のある紙書した兵器帳と、永元十年（九八）の年号

のある紙文書があり、このころに紙が行われていたことを証している。（世界文化史大系中国Ⅰ）。それについでまもなく興元元年（一〇五）蔡倫がぼろくずから紙をつくることを考案し、その製造法を改善した。漢のとき路温舒という人がある。鉅鹿の人で字を長君といい、父が羊を牧せしめた。かれは貧しくて、沢中に生えている蒲を截って牒をつくり、それを編んで文字を写すに用い、やがて字が上手になって、獄吏に採用されたという話がある。木簡から紙にうつる過渡的なものが想像される。文房四譜に、漢が興ってすでに幡紙があり、簡に代用されたがまだ通行するに至らなかったといい、また、成帝（BC32―7）のときに赫蹏というものがあって、詔を書するに用いられた。応劭の注釈ではこれは薄小紙であるという。（漢書外戚伝）。太平御覧に晋の王隠の晋書を引用して、魏の張揖の古今字詁という字書に、紙は今の捃である。その字は巾に従っている。古えは縑帛をもちい、書の長短に依って、事に随って絹を截ち、枚数重沓した。これを即ち幡紙と名づけた。字は糸に従っている、という。これらの諸説から考えると、紙というのは縑帛をある大きさに截ってそれを重ねて使用する習慣から生じて、次第にその材料が変化して、後漢の和帝（八九―一〇五）の朝の蔡倫が元興元年（一〇四）、製法を改善したころから今日のような紙が行われて、そののち次第に簡牘に代るようになるのである。

墨は古くから煤とか天然の石墨のようなものをもちいたであろうと考えられている。これに膠をまぜたり、漆をまぜて使用したようである。今、その墨で書写した実例の見られるのは湖南長沙の仰天湖から出土した木簡に書かれている文字においてである。墨の形をなしたものとしては、前記の望都の漢代の墓の壁画に、円板の硯の上に、円錐形の墨がのせられている。これによって後漢のころに固形の墨のあったことがわかる。これは煤を膠で固めてつくったものであろうとおもう。古くは墨のことを墨丸といっている。墨の古い形式にはまた球形をなしていたものがあることが知られる。東宮旧事に「皇太子初拝、給香墨四丸」とあり、「陶侃献晋帝牋三千枚、墨二十丸、皆極精良」とあり、趙一の非草書に、「十日一筆、月数丸墨」とあるなどみなその例である。また「汲太子妻与夫書曰、并致上墨十螺」とある。螺というのも墨の形から名づけられたものであろう。

以上、筆硯紙墨について、その発生の起源をとき、その初期の文献を検討することをこころみたが、とにかくこの四種はこのように古くから行われてきて、次第に精良なものへと改善されつつあったことがわかる。しかし、これがいわゆる文房具として賞玩されるようになるのは、これが形式内容ともによく発達してからのことと考えるべきであり、その発達にともなってその鑑賞の程度も漸次高まって行ったものとおもう。

そこで、次に、文房具が歴史の上においてどのように賞玩されきてたかということについては、これが題材としてとりあげられている古来からの文学作品についてみれば、その実際のすがたを想像することができるであろう。

後漢の和帝から安帝のころ（八九―一二五）に官に仕えた李尤という人は、文章家として名があらわれていた。その人に筆銘、硯銘、墨銘という短文がある。

筆銘、「筆之強志、庶事分別、七術雖衆、猶可解説、口無択言、駟不及舌、筆之過誤、愆尤不滅」

硯銘、「書契既造、硯墨乃陳、篇藉永垂、紀誌功勲」

墨銘、「書契既遠、研墨乃陳、煙石附筆、以流以伸」

とある。これらはちょうど鏡に銘文があってその一部分に書かれて鋳造されているように、筆の軸、硯板などに書きつけたり、彫刻したりしたものではなかろうか。これらの銘文はそれらの性能をとき、それを称賛するためのものである。とすれば文房具がある程度までは座右において愛玩する器物として取り扱われていると見てよいであろう。

後漢の霊帝のときの人で・文章家として名高く、書をよくし、太学の門外に石経を建てたことでも知られている蔡邕（一三二―一九二）に筆賦というつくしい文章がある。そのなかに、「惟其翰之所生、生于季冬之狡兎、性精亟而慓悍、体遒迅而騁歩、削文竹以為管、加漆絲之纏束」とある。これによると、季冬十二月のすばしこい兎の毛をとってつくり、うつくしい斑紋のある竹を削って筆の軸をつくり、その軸に毫をさしこんで、漆の絲でまきつけるという。これを見ると、筆はただ実用というだけではなく、そのつくりかたも精巧になり、装飾もほどこされていたことがわかり、筆のうつくしさをすでによく賞玩して用いていることがわかる。

つぎの三国魏の時代になると、繁欽という人が硯頌と硯賛をつくっている。この人は詩文の才能のあることで知られた人で、建安末年に卒している。文房四譜にその硯頌と硯賛を載せている。また、魏の王粲に硯銘がある。王粲は詩文で名高く、その登楼賦は佳作として知られている。その硯銘はまた「文房四譜」に収められている。その文に、

「爰初書契、以代結縄、人察管理、庶績誕興、在此季末、華藻流淫、文不写行、書不尽心、淳樸澆散、日以崩沈、墨運翰染、榮辱是徴、念茲在茲、唯玄是徴、」

とある。これは文章を書写する人に古代の人の淳朴さが失われたことを慨歎する詩であり、硯にこの銘を録して、懐いを寄せたものと思われる。座右に硯を愛玩している人でなければできないことである。

魏の曹植の楽府のなかに、「墨出青松烟、筆出狡兎翰」というのがある。これによるとこの時代に松烟墨と兎毫筆が用いられていたことが解る。

つぎに、晋時代になると、傅玄（二一七―二七八）という人が、筆賦、筆銘、鷹兎賦をつくり、作品のなかに筆を題材としてとり入れている。

筆賦に、

「簡修毫之奇兎、選珍皮之上翰、濯之以清水、芬之以幽蘭、嘉竹挺翠、彤管含丹、于是斑匠竭力、良工逞術、纏以素枲、納以玄漆、豊約得中、不文不質、爾乃芳松之淳烟兮、写文象於紈素、動応手而従心、煥光流兮星布、柔不絲屈、剛不玉折、鋒鍔淋漓、芒跱鍼列、」

とある。これによると兎毫の筆で、軸は技巧をこらした精美なもののようであり、毫を軸にさし入れ、白い麻の糸でくくりつけて、黒い漆でかためている。そして、松烟墨をもちいて絹本の上に、よい字を書くということが、美しい文章でえがかれている。これは筆というものを賦の題材としてとりあげて作ったのであり、その形容もうつくしく、まったく賞玩の対照となっていたことをよく物語っている。

このほか、晋代には郭璞にも筆賛があり、嵇含にも試筆賦があり、また、成公綏に、棄故筆賦がある。棄故筆賦の文に、

「序曰、治世之功、莫尚於筆、筆者畢也、能畢舉万物之形、序自然之情也、力未尽而棄之糞掃、有似古賢之不遇、於是、収取洗而棄之、用其力而賤其身焉、有蒼頡之奇生、列四目而兼明、慕羲氏之画卦、載万物於五行、乃発慮於書契、採秋毫之穎芒、加膠漆之綢繆、結三束而五重、建犀角之玄管、属象歯於纖鋒」、

とある。筆の功労をたつとんでそれをむざむざと汚物のなかへ棄てるにしのびないので、それを鄭重に洗い清めてから棄てるという意味をのべている。のちの筆冢の故事の源流にあたるものである。筆の使用の量も多くなったであろうし、それを大切にしようとするのは筆に対する愛玩のこころが深くなってきていることを示している。この文中に、「犀角の玄管を建て、象歯を纖鋒に属す」といっているのは、筆管に犀角や象牙をもちいて修飾していることを詠じているものである。これを見ると美しい精巧な細工をした筆が用いられていたことがわかる。書が盛行

した晋代には、その用具にもかなりの発展があったことが考えられる。

傳玄にはまた硯賦がある。その文に

「採陰山之潛璞、閱衆材之攸宜、節方円以定形、鍛金鉄而為池、設上下之剖判、配法象乎二儀、木貴其能軟、石美其潤堅、加朱漆之膠固、合仲徳之清玄、」

とある。「陰山の潛璞を採り、衆材の宜しきところを閲す」といい、「木はそのよく軟なるを貴び、石はその潤堅なるを美しとする」という。硯に玉石を用いている。木は台座に用いたのであろうか。「金鉄を鍛えて池とし、上下の剖判（区分）を設く」というから、金属で硯池をつくっているようである。晋代には硯の材料や形式もよほど進んできているかと思われる。

また、晋の王羲之に筆経という著述があり、今、その文章が残っている。筆毛に兎毫を用いる説などもこの本にのべられている。しかし、兎毫は王氏より以前にすでに用いられている。

傳玄の子傅咸に、紙賦がある。その文に、「蓋世有質文、則理有損益、故礼随時変、而器与事易、既作契以代結縄兮、又造紙而当策、夫其為物、厥美可珍、廉方有則、体潔性真、含章蘊藻、実好斯文、取彼之弊、以為己新、攬之則舒、捨之則卷、可屈可伸、能幽能顕、」

とある。古代から用いられていた木簡に代って紙が用いられるようになり、その珍しいことと、くりひろげたり巻いたりする自在のとりあつかいの便利さを説いている。紙の性能のよさに注目している。

斉の蕭子良が王僧虔に与えた書簡のなかに、「左子邑（左伯、漢代の人）の紙は研染輝光なり、韋仲将（韋誕、魏代の人）の墨は一点、漆の如し、張伯英（張芝、漢代の人）の筆は、神を窮め思いを尽す」、といっている。これは紙墨筆について、誰のつくったものがよいかを述べた記事で、文房具では誰のつくったどのようなものがよいかという優劣上下の鑑賞眼がすでに熟してきていることを示している。ただこの場合、これらの文房具を造った人は、いわゆる職人ではなくて、当時の一流の名家の名が出ている。これは自分で手を下して造ったのではなくて、その下の職人に命じて造らせたものとおもわれる。

以上の記事によって、後漢から魏晋にかけて、書道の発達にほぼ平行して、筆硯紙墨のたぐいを鑑賞することがさかんになってきて、その品質も次第に向上しつつあったことが了解される。

晋代の硯については、後に宋の米芾が、その著書「硯史」のなかで、硯の発達の歴史を簡単ながら説いている一章がある。それには晋代の硯として、晋の名高い画人顧愷之の絵画のなかから例をとってかかげている。その記事によると、晋代の硯は風字硯とよばれるところの「風」の字の恰好をしたもので、裏面には小さい足が二本ついている。この足を鳳足と名づけている。

むかしから伝来した硯に右軍硯というのがある。これは王右軍すなわち王羲之が所持していたものであるという。その形はやはり風の字になっている。右軍硯といえば風字硯の一つの型となっている。それは、中心部がやや凹んで、向うに硯の海があり、全体はやや前のめりになっている。これは古い硯の形式である。

古い硯の形式において、硯の表面が水平にならずにななめになっている理由については、古人は床の上に膝をまげて坐っていたので、机の上に硯をおかないで、床の上にぢかに硯をおいて墨を磨るから、いきおい前のめりの姿勢になるのであるという。いかにもっともな説である。これは一応理窟としては無理のないことである。しかし、米芾は、その画史のなかに、晋唐時代はみな鳳池硯、すなわち風字硯のような恰好をしている。中心は凹んで斜めの姿勢になっているので、筆鋒に墨をふくませるときに、筆の鋒のまわりに十分よく墨汁がふくまれて、それによって書かれる書画もむっくりと筆の全体に墨がふくまれたものができあがって、一方にかたよったりしないといっている。この米芾の説もまた一理がある。むかしの墨は松烟墨で、質もやわらかいので、硯面において墨を磨るということは重要なことではなく、むしろ墨の粉を水に溶して墨汁をつくって凹みにためておくのが目的であったと考えられる。

風字硯のほかに、米芾はもう一つ円形の銅硯のことを記している。これは、中心が鑿（いりなべ）のようになっていて、周囲に十本の足がついている。古い硯にはさきの風字硯のほかにもう一つこのような円形の硯、これを円面硯とよんでいるものがある。この二種類のものが主として行われていたのである。漢の望都の壁画にえがかれている硯も円形であり、硯の円形のものは古くに源流があるとおもう。

ところで、石硯、すなわち石材でつくった硯は唐以前には行われなかったという説がある。（避暑録話）。しかし文献を調べて見ると実際はそうではない。南朝の宋の虞龢の論書表に「呉興郡をして青石円硯を作らしむ。質滑らかにして墨を停む。殊に南方瓦石の器に勝る」とあって、南朝の宋のときに、青石をもちいて円形の硯をつくらせている。この青石というのは青州の石ということではなく、青い色の石の意味らしいが、南方の瓦石よりすぐれているというので、墨汁のしみこんでしまわない石材の硯をつくっていることが注目される。梁の庾肩吾の書啓にも

「烟は青石を磨す」とあって、墨で青石の硯を磨することをのべている。石材の硯が梁代にも用いられている。また、南史の王慈伝に、慈が年八歳、外祖の宋太宰、江夏の王義恭が之を内斎に迎えて、宝物を施しあたえ、恣(ほし)いままに取らせたとき、慈は素琴、石硯および孝子図を取った、とあり、石硯が記されている。

このほかに古い時代の硯の材料としては、土をこねて形をつくり、焼きあげたいわゆる陶硯がもっとも普通に行われていたようである。これを一に瓦硯とよんでいる。唐代ではまたこれを硯瓦とよんでいる。（米芾、画史）。瓦というのは陶製の器という意味でもちいているので、後につくるようになった古瓦を応用してつくった瓦硯とは意味がことなっている。陶硯の例は六朝時代のものが出土した例があるという。

このほかに銅とか鉄とか玉などの硯もあったことが詩文などの文献によって知られるものもあり、硯の材料にも各種のものがあった。

斉梁時代は六朝のうちでももっとも華麗な文化の栄えた時期である。文学においても美しい駢文が流行し、書道においても自然美を織りこんだ雑体書が喜ばれた。文房具においても同じように華美なものが行われていたことは、いくつかの文献の示す例によって知られる。たとえば、梁簡文帝の謝宣賜白牙鏤管啓とか、梁の呉均の筆格啓、同じく庾肩吾の謝賚銅硯筆格啓などがあり、筆格とか牙製の筆管といったようなこまかい文房具までも題材としてとりあげられている。その牙管を形容したことばにも「雕鐫精巧、鏤出東山之人物、図写奇麗、笑蜀郡之儒生」とあり、精巧を極めた華美なものである。筆格の啓にも「烟磨青石、已践孔鯉之壇、管挿銅龍、還笑王生之壁」とあり、青石の硯に松烟の墨をもちい、筆管を銅龍の筆格に挿すという。また、梁の徐摛に詠筆詩があるなど、この時代の文房具の多様化し、また意匠の華美になってきたことがよくあらわれている。

本来、筆硯紙墨の四宝は、文房具として欠いてはならない重要なものであることは、むかしから変ることはないが、唐代のはじめになると、これらの文房の四宝が、つねに一連のものとして、形式実質ともに、ますます精良なものがつくられるようになったと見えて、当時の文献には、すでにはっきりと筆硯紙墨の四宝を同時にならべて掲載している。たとえば、初唐の書の名家で知られた虞世南のあらわした北堂書鈔は、一種の百科全書のような性質の著述であるが、その第百四芸文部に、筆紙硯墨の四条を設けて、それぞれに関する故事を収めている。おなじく欧陽詢の芸文類聚には、巻第五十八雑文部に、紙筆硯の三条を設け、それに関する詩賦、賛銘、書啓の例をあげている。ただし、墨はとりあげていない。唐の中ごろ、玄宗の朝に勅撰によって編集された初学記には、巻二十一文部に、筆紙硯墨の条があり、おなじくこれに関する故

事や遺文を集めている。その内容は前の二書より多くなっている。のちに宋代の初になって、蘇易簡が文房四譜を編集するときには、このような唐代の類書に負うところが多かったことと思われる。

文房四譜を見ると、文房四宝に関する唐時代の文学作品を多くあげている。今、それを拾ってみると、

「筆」　賈　耽　　虞書歌
張　碧　　答張郎中分寄翰林貢余筆歌
白楽天　　雞距筆賦
竇　紃　　五色筆賦
僧貫休　　詠筆詩
白楽天　　紫毫筆楽府詞
韋　充　　筆賦
衛公李徳裕　　斑竹管賦
韓　愈　　毛穎伝
魏傳公　　選筆銘
周　樸　　謝友人贈牋紙并筆
段成式　　寄温飛卿葫蘆管筆往復二首
温庭筠　　答
陸亀蒙　　石筆架子賦
陸亀蒙　　哀茹筆工辞
段成式　　寄余知古秀才散卓筆十管軟健筆十管書
余知古　　謝段公二色筆状

殷　元　筆銘
孔　璠之　筆讚
文嵩四侯伝　管城侯毛元鋭伝

「硯」

楊師道　詠硯詩
李　賀　青花紫硯歌
韓　愈　瘞硯文
張少府　石硯賦
黎　逢　石硯賦
呉融（字子華）　古瓦硯賦
王嵩夢　孔子石硯歌
李　琪　謝朱梁祖大硯瓦状
僧貫休　詠墨詩
荘南傑　寄鄭蜡畳石硯歌
李　琪　詠石研
劉禹錫　贈唐秀才紫石硯詩
文　嵩　石墨侯石虚中伝

「紙」

（薛道衡　詠苔紙詩）
韋　荘　乞彩牋歌
僧斉巳　謝人贈棻子綵牋詩
舒元輿　悲剡溪古藤文

周　朴　謝友人恵牋紙并筆
段成式　与温庭筠雲藍紙絶句并序
文　嵩　好畤侯楮知白伝
「墨」張仲素　墨池賦
李　白　酬張司戸贈墨歌
僧斉巳　謝友恵墨詩
段成式　送温飛卿墨、往復書十五首
文　嵩　松滋侯易玄光伝

これらを見ると、題詠のもの、贈答のものを詩賦歌賛に作っているものが多い。なかでも韓愈の毛穎伝とか、文嵩の四侯伝などは、文房具を人間に見立てて、その伝記をしるす体に倣って、戯文のように作っているのが注目される。文房具を人間と同様に取扱うところなど、この鑑賞の方法がよほど深くなってきたことを思わせる。

硯について考えてみると、唐時代には六朝以来の風習を承けて、やはり多くは風字硯と円面硯の二様のものが行われていたようである。わが正倉院に宝蔵されている有名な青斑石風字硯は、うつくしい青斑石の石材を六角形につくり、その中心に陶製の風字硯をはめこんだものである。これはあきらかに唐代の風字の瓦硯であって、その実物として見ることのできるたしかな例ということができる。米芾の硯史にいうところの晋人の風字硯というのも、およそこのようなものであろう。それがずっと唐時代まで同じような形式で行われていたものと見てよい。因にこの風字硯の形式のものは、わが国においても奈良から平安時代に及んで、ほかにも伝存する例がある。

円面硯にもまた実物の伝わったものがある。これは唐三彩でつくられたもので、横河民輔氏旧蔵のもので東京国立博物館に所蔵されている。これは円形の表面の周囲に溝がとりまかれていて、中心部の面の上で墨をすると、墨の汁が円周の溝に流れおちるようになっている。下部は台座になっていて、多くの足がついている。これは米芾が十蹄円硯といっているのが、十本足のある円面硯をさすとおもわれるから、あるいはこのようなものであろう。この例は新羅焼の陶硯にも見られる。ただし、これには蓋がついている。もと総督府博物館蔵品（硯墨新語参照）。こ

のように中心部が凸起して、表面の周辺の溝に墨汁が流れおちるようになった形式のものを、一にまた辟雍硯とよんでいる。（米芾硯史）。これは中国における古代の学校建築の様式が、周囲に水をめぐらしていたのに因んで名づけられたものである。この形式のものは、のちに清朝の乾隆ごろには石渠硯ともよんでいる。

円面硯の例には、もう一つわが国に実物の伝わる著名なものがある。河内の道明寺所蔵の天満宮白磁円面硯がそれである。大きさはかなりの巾のある美事なもので、菅原道真の使用したものと言い伝えられている。日本製ではなく、唐から舶載されたものとされている。これはたしかに唐の十蹄円面硯の形式である。ただ、下面が磨りへらされている点は遺憾である。

唐代までは、大体風字硯と円面硯の二つの形式のものが行われていたと見られる。そしてその習慣は日本にも影響を及ぼしたとみえて、わが国でも奈良時代から平安時代にわたって残っているのは、風字硯の形式とこの円面硯の形式のものとである。

しかし、唐代では右の二つの形式に限られたわけではなく、またこれ以外のいろいろな形の変ったものもいくつかある。

その一つに、唐三彩仮山硯がある。（人民中国昭38・2）。これは陝西省の唐代の墓のなかから発見されたものという。山岳の形にかたどり、山の嶺のすがたにつくって、その頂上には鳥が一匹とまっていて、山のふもとには水のたまる小さい池がある。これは硯というより、のちに宋代になって行われる硯山とよく似ている。このように硯を立体的な山水の形式につくることは、のちに宋の米芾などがこのんでやるところであるが、その形式はすでに唐代に発していることがこれでよくわかる。

また、米芾の硯史にしるすところによると、唐代の墓のなかから出たものに蓮葉型のものがある。蓮の葉の形に似せてつくり、中心は凹んだ恰好になっている。唐時代にはこのような変った形のものもつくられたことを示している。

唐代に行われた硯に、澄泥硯がある。これは河の中に沈澱するこまかい粘土を精製して、それによってつくった硯の型を陶器の窯で熱きあげたものである。材料や製造法はともに石材の硯よりも精巧微密で、墨色もよく出るというので、むかしからたいそう良硯として珍重されている。この製造法については、蘇易簡の文房四譜や米芾の硯史に、かなりていねいに解説されている。産地は河南省霊宝県にあたる虢州のものがよいということで、唐代の人はこの虢州の澄泥硯を硯品第一としたといわれている。（硯箋三、欧公の語として引用）。わが国の文房具の蒐集家で名高い湯川玄洋七石翁の所蔵していた虎伏という、虎の伏した形につくられた澄泥硯は、こういうものの名品として知られたものである。

澄泥硯にはいろいろな形式のものがつくられ、好事家のあいだにも賞玩されている。ときには漢代の瓦の形に倣ってつくった瓦形の硯が唐代にも行われていたということである。（硯箋）。西清硯譜にも、陶硯の属に澄泥硯の石渠、虎符その他多くの形質の作を収めている。

古瓦をそのまま硯に見立てたものがある。また古瓦の状に倣って作ったものもある。このことは文房四譜に見えているので、唐代またはそれ以前から行われていたであろう。その一例に未央宮瓦頭硯がある。未央宮は漢高祖の七年、丞相蕭何が長安の都に建設した壮麗無比の宮殿として知られる。その瓦の銘文に、漢屏天下、長楽未央、長生無極、萬寿無疆、太極未央などの語がある。この銘文のある瓦当（巴瓦）の部分を応用して硯につくったもので、形式としては円面硯に似ている。瓦当の銘文が硯の装飾となって、すこぶる古雅な趣を添える。原瓦のものは稀で、たいていは倣製品である。手近かでは藤田美術館に、「永受嘉福」と「漢屏天下」の二面がある。図録では欽定西清硯譜の巻首に、漢未央宮東閣瓦硯と漢未央宮北温室殿瓦硯がある。一つは中央がやや高くなった平瓦の上面に硯池を刻したもの、一つは筩形の瓦の表面に硯池をつくり、筩首には半瓦当の雕紋があり、背面に「蕭何監造」とある。いずれも円硯ではない。

古瓦硯で有名なものにもう一つ銅雀台硯がある。銅雀台は魏の曹操のつくった台名。漢の建安十五年（二一〇）河南の鄴城に造営された。その瓦をもちいてつくった硯である。藤田美術館蔵品がある。図録ではこれも西清硯譜巻一に、未央宮瓦硯についで、漢銅雀瓦硯六面が掲げられている。これも中央の高くなった平瓦の表面に硯池を雕造した形式のもので、背面にいずれも「建安十五年」という年記がある。古瓦硯は硯のなかで最も古い素材のものとして、第一品として尚ばれている。

唐代の墨については、わが正倉院に唐墨十六梃がある。松烟墨である。そのなかに開元四年丙辰（七一六）の款記があり「華烟飛龍鳳、皇極貞家墨」の銘のあるものがあり、また、「新羅楊家上墨」「新羅武家上墨」の銘記のあるものがある。唐墨の形質を知るにはこれにまさるものはない。

唐代の紙についても、正倉院の書蹟に見られる色麻紙や白麻紙、また白麻紙の上に彩色の刷毛書きの飛雲とその間を飛びかける燕、鳳凰、麒麟の図をえがき、裏面に白い飛雲をかいた絵紙がある。飛雲は飛白の書法によっている。これなども唐紙の製法によるものとしてめずらしいものと云えよう。

本国では、蜀妓薛涌のつくった深江の薛涌牋が名高い。蜀の益州地方からはまた十様蛮牋というものが産する。謝公十色牋というのに、深

紅、粉紅、杏紅、明黄、深青、浅青、深緑、浅緑、銅緑、浅雲の十色のものがあるのがこれにあたるであろうという。蜀の地方は古くから紙の名産地で、元の費著に「蜀牋譜」、「牋紙譜」の二著述がある。

概して唐代に書などに用いられているのは加工をした色彩の美しいものばかりである。書を鑑賞するのに生紙を用いたりすることはない。

五代になると、南唐の天子李煜というのが、たいそう美術を愛好し、書画を蒐集するとともに、文房具にもきわめてよい趣味をもっていた。その蒐集品には「建業文房之印」という鑑蔵印を用いている。今、書画のたぐいに、時にこの印を見ることがある。たとえば、唐の懐素の自敍帖の合縫にこの印がおされている。そのほか現存の法帖のなかにもこれを見ることができる。この印文に「文房」というのは、もはや文書を司るところばかりではなくて、書画や美術品を収蔵し鑑賞するところとなっていることは、前述のとおりである。

李煜は文房具にはもっとも心を寄せて、紙は澄心堂紙、墨は李廷珪墨をつくり、硯は龍尾硯をつくったという。澄心堂は南唐烈祖李昪の書斎名であるが、李煜がこれを襲うて、その製した紙にこの名を取って名づけたるものと見られる。この紙はあたかも雞卵の薄皮のようにたいそう良質の紙で、紙のなかの最上品とされている。宋代になってからも珍重された。書画のなかにこの紙を用いたと言っている例を見ることがある。また明の文房書の考槃余事のなかに、宋板のなかに澄心堂紙を用いたものがあって、たいそう精本であることを述べている。清代になってから、乾隆帝がこの倣製品をつくったのが、今日なおときに見ることがある。山水や花木を金泥などでえがいた下絵があって、いかにもうつくしい紙である。墨工の李廷珪は南唐の易水の人、安徽の歙州に移居した。もとの名は奚庭珪といい、鼐の孫にあたる。のち李姓を賜わり、名を廷邦と改めた。その家は代々墨を製造していたが、廷珪になってますます名があらわれた。宋以来第一に推称されている。その墨は玉のように堅く、犀角のような紋がある。署名の印文が「邦」になっているのが上の品で、「圭」がこれにつぎ、「珪」がまたこれに次いでいるという。宋の李孝美の墨譜に、李廷珪墨が図譜にして示されている。その一つに、表面が龍の図になり、署名は「歙州李庭珪造」とある。

龍尾硯というのは、江西省婺源県の龍尾山に産する石をもってつくられたもので、いわゆる歙硯の品質のよいものに属する。南唐硯とよばれて硯の中の名品として珍重されている。

以上、澄心堂紙、李廷珪墨、龍尾硯の三種は、むかしからその品質のすぐれたことにおいて、文房具の第一品と称せられているものである。宋代になると、文運の発展にともなって、唐五代までにつちかわれてきた文房具の趣味が、いよいよ深くなってくる。

宋代の初めに蘇易簡が「文房四譜」をあらわす。西紀九八六に成った著述である。著者の蘇易簡は名門の家柄の出身であり、その家系からは四代つづいて宰相を出している。その上、代々書画の蒐集に豊富であったことで名高い。この家の所蔵していた書画の名品で、今日もなお知られているものが少くない。この収蔵のことについては宋の米芾の書史などにくわしい。その著書の「文房四譜」は、もと文房四宝譜とよばれていたらしいがのちに文房四譜とよぶようになった。その内容は、筆硯紙墨の四宝に分ち、そのそれぞれについて、敘事、造、雑説、辞賦、すなわち、その歴史上の断片的な記録と、製造法と、故事逸話のたぐいと、文学作品の四つの項目に分って、おのおのくわしく文献が列挙されている。この本によって、四つの文房具の発達の歴史はどのようであったか、その製造法はどのように行われたか、また、むかしの人々のそれについての故事逸話などにどのようなおもしろい記事があるか。文房具を題材にした詩文、賛銘、表啓などにどのようなものがあるか、これらが一書にまとめられて概観することができるようになった。これこそ文房具の鑑賞のためのまず第一に読まれるべき本であるといってよい。この著書の発表は文房清玩の第一の出発点となった。

宋代は近世の学問芸術の勃興した時期である。新しく興ったものに金石学があり、鐘鼎彝器等の古器物の研究も盛んになり、みなそれぞれまとまった専門の著述があり、また、玉器などにも専門書がつくられている。文房すなわち書斎を中心にして、文人学者たちがもっともよくこれらの研究と趣味を発揮した。かれらの研究と趣味は譜録の形式をもちいて、数多くの著作がつぎつぎに作られている。文房具についてももちろんこのとおりである。

まず、硯について云えば、

欧陽脩「硯録」　米芾「硯史」　唐詢「硯譜」　唐積「歙州硯譜」　無名氏「端渓硯譜」　高似孫「硯箋」
無名氏「硯譜」　李之彦「硯譜」　無名氏「歙硯説」　無名氏「弁歙石説」

があり、墨については

晁貫之「墨経」　何薳「墨記」

など、多くの譜録があらわされている。このように譜録の形式で、文房具などの鑑賞を行うことが一種の流行となって、なかにはのちになって図譜の形式で図入りのものもあらわれた。

文房具のなかでもっとも重んじられたのは硯である。その硯のもっともよいのは宋硯といわれる。ここで、あらためて硯について、もう一度ふりかえって考えてみることとする。

硯に石材をもちいたのは、すでに六朝時代に例を見ることができることは、前にも述べたとおりである。しかし、石材のひろく普及するようになるのは唐の半ごろ以後のことと考えられる。それまではそれほど普通に使用できるような石材が発見されていなかったのであろうとおもう。そのために陶硯の風字硯や円面硯のようなものが主要なものとなっていたのであろう。唐の玄宗の開元年間に、江西省婺源県の歙州の硯が開掘されて、はじめてここに硯材として優秀なものが出現するようになった。また、一説によると、唐の初めの武徳年間（六一八―六二六）端渓（広東省高要県）が開掘されたという。この説は宋の蘇東坡のことばとして、清の計楠の石隠硯談に見えているが、しかし、これは確実な説かどうかわからない。唐代において、中唐のころには端渓の硯の行われていたことは、文献の上から知ることができるので、（下記参照）、唐代に端渓硯のあったことはたしかに認められる。とにかく、歙州と端渓の二種の石材が唐代になって世に行われてから、石硯がいよいよ硯の本格的な材料として発展してゆくのである。

この歙州と端渓の二種は、どちらかといえば歙の方が早くに重んぜられたらしい。南唐のとき、李後主が官設の硯をつくる官吏、すなわち硯務官をおいて、歙州の竜尾石を採取させ、それをもちいてその好尚にかなった硯をつくらせたというのも、この石材がすぐれていたからであるとおもう。宋代になって、また欧陽脩が珍蔵していた硯に、南唐の官硯がある。四方形の浅い平たい形のもので、石質はきわめて良好なものであったようである。そして、欧陽公は、硯の石は端渓より歙州の方がすぐれていると云っている。ところが、また文房四譜のなかには、今、歙州の山に石があり、俗にこれを竜尾石という。匠人がこれを製する。また端に亜ぐ、といって、端の方を上位においている。これをみると端渓と歙州との優劣は容易に定めにくいことがわかる。

歙州にはいろいろ石理紋様についての見どころがある。金星とか銀星とか羅紋とか刷絲などというような、うつくしい石材のけしきが賞美される。このことは米芾の硯史にも見えているし、唐積の歙州硯譜という専門の書物にも説明があり、南宋の末葉につくられた趙希鵠の洞天清禄集のなかにもくわしい記述がある。

一たい、硯の石理紋様は、本来石の疵として見られるものであるが、これが石材のけしきとなって賞美されるようになり、硯工の技術のたく

みさによって、その石理紋様を利用して、うまくそれを硯の景色にとり入れるようになったものと思われる。

その一例として、手近かに見られるのに、「七襄報章硯」というのがある。（藤田美術館蔵）。これは歙州硯のたいそうよい例としてあげることができる。この石には中間に銀色の線が二本走っていて、金星が二つはっきりあらわれ、地紋にも何かきらきらと光る星のような紋様がある。水にぬらすとそれがより以上はっきりあらわれる。まさに歙州の石紋の約束どおりである。その石紋がちょうど天の河の七夕の星空に似ているので、詩経のなかの小雅大東篇に、「跂彼織女、終日七襄」七夕の織女星が七襄の機を織るといい、「雖則七襄、不成報章」七襄の機を織っても、織模様ができ上らないという意を取って名づけたものである。歙州の石質地紋や色などをたくみに利用した名硯の一つである。これは江戸時代に中国から渡来したものらしく、もと池大雅が珍蔵し、旅行中にもたえず携帯していたという。この硯のことは鳥羽希聰の和漢研譜巻三にも掲載され、銀河研と題されている。むかしから著名なものに数えられているものである。明治十年二月十五日、天皇陛下が京都大阪鉄道開業式に行幸になったとき、ちょうど西南戦争がおこって、大阪に内閣行署がおかれていた。そのとき大阪府庁においてこれを天覧に供したといういわれがある。当時の名家の長三洲、小林卓斎、谷鉄臣、田能村直人、山中信天翁、妻鹿友樵などという知名の士の題跋が多く加えられている。このとき所蔵していたのは内海有竹という人であった。

つぎに端溪について考えてみる。端溪については、唐の中ごろに出た李賀（七九一―八一七）という詩人の青花紫石硯歌のなかに、「端州石工巧如神、踏天磨刀割紫雲」とあり、端州の名があきらかに記されている。また白楽天とならんで有名な詩人劉禹錫（七七二―八四二）の贈唐秀才紫石歌にも「端溪石硯人間重、贈我応知正草玄」という句がある。これによって端溪の開掘は唐代の中ごろ九世紀の初期より以前に行われていたことが証明できる。澄懐録に、楊雄草玄硯というのがあり、「正草玄」というのはこのことを指していう。

そののちも端溪石は重んぜられたようで、宋の初のころ、この地から宮中に硯を献上する習慣があり、それを貢硯と称していたという、宋初に出た蘇易簡の文房四譜にも、端溪石の産出状況をくわしくのべ、石のなかにある眼とか金綫文のことまでのべている。山の名を斧柯山と云っているから、端溪（広東省高要県）であることはまちがいはない。

また、宋の欧陽脩の硯譜に「今見官府典史、以破盆甕片研墨作文書尤也」とあって、官署の役人は陶器の破片をもって硯にまにあわせて文書をつくるのにあてていたようである。これに対して、仁宗以前の史院の役人たちは、端溪石でつくった官製の硯を賜っていた。それは当時の端

渓の坑の最上級のものとされている下岩の坑から採掘された上等の石であった。この形は風字から変化して、下部のやや巾の広い鳳池硯型につくり、足はなく、ときには周囲に花紋を刻したり、中心に魚や亀を刻したりしたものがあったという。このことは米芾の硯史に見えている。

端渓石硯がさかんに行われるようになるのは、北宋末、徽宗皇帝のころからで、南宋末の趙希鵠の洞天清禄集に記すところの説では、歙州よりも端渓の方を上位においている。端渓硯は南宋以後、ますますもてはやされるようになり、のちに明代になってさらに新坑の開掘が進んで流行を来すこととなる。

しかし実際上、石材は歙、端二種にはとどまらず、このほかにもいろいろ種類のものがあった。米芾の硯史にもあちらこちらのめずらしい石をもちいて、さかんに硯をつくっている。そのなかでも青州の紅絲石とか洮河緑石（陝西省臨洮県）とか淄州石硯（山東）など世に名を知られたものも多く、石材の産地はひろく中国全土にわたっている。玉器などにも硯をつくったものがあり、前記の古玉図譜などにも古来の玉製の硯を多くかかげている。

硯の形式も、宋代になると、従来ひろく行われていた風字硯も、いくらか形が変ってくる。はじめは風字型の腰の部分がやや細くせばめられた形に変ってくる。そして、さらにまた下部が開いてきて、斧のような形になる。おなじ風字硯といっても、時代の降るとともにその形が変化してくるのである。円面硯の場合も同様で、宋代になるとこれも硯の中に一つの型として行われるが、その形はまたいろいろと変化してくる。円面硯と同様に周辺に水を溜める形式になったものに辟雍硯がある。普通は四角いが、また八角のものもある。しかしたいていの普通の硯は長方形の平たい形をとるようになる。風字硯の前のめりに傾斜したものはなくなる。これは書斎の机の上において使用し、床上に坐る習慣から、腰掛式の習慣への変化から来ているとおもう。長方形の硯がもつとも基本的な形となり、墨道と硯池のある形につくられたものが、一般的に流通する。それに銘文を刻したり、紋様を彫刻したりして修飾を加える。

宋硯の装飾硯で有名なのに蘭亭硯がある。その面や側面、背面全体にわたって、蘭亭曲水宴の情景や詩文をこまかく彫刻したもので、わが国にもいくつか所蔵者がある。（藤井有隣館、藤田美術館、綿貫氏蔵）。あるものは背面に王羲之の蘭亭敍の全文を彫刻している。

米芾の硯史をみると、硯の形式はこのほかにもいろいろ変ったものをかかげている。硯の一部分に穴をあけて、そこへ筆を立てるようにしたもの、鳳凰の蓋がついていて、硯の面に雑花の彫刻をなし、金泥や紅漆の彩色をほどこしたうつくしいものもある。これは五代の蜀の王衍の

遺物であるという。また、米芾が自分で考案したものに、硯の上に屋根のように石をはめこんで層をつくり、その層から水がひとりでに硯池にしたたり落ちるようにしたものもあり、たいそう趣好をこらしている。当時硯の名産地には商人たちが精巧な雕刻をした硯をつくって、高価に売りつけるものが多かったという。硯の形の名称については、宋人の撰述した端渓硯譜につぎのように記している。

硯之形製、曰平底風字、曰有脚風字、曰垂裙風字、曰古様風字、曰鳳池、曰四直、曰古様四直、曰双錦四直、曰合歓四直、曰箕様、曰斧様、曰瓜様、曰卵様、曰璧様（以下略）

とある。風字硯の底の平たいもの、脚のあるもの、また風字硯の変形、類似形のものが半ばを占めているのを見ると、宋代ではまだ古風な風字形の硯がかなり行われていたことが考えられる。

宋代の硯の鑑賞について言いうることは、この時代はすべてにおいて意を尚ぶのを主としたことがその大きな特色となっている。思想、文芸すべてにわたってそれが認められる。硯についても六朝から唐まではその工芸的な美しさに重きをおいてきたが、宋になると石そのものの材質を深く鑑賞するようになる。石の鑑賞にはまずその本質をとらへ、天性の美しさを味わうことにある。歙州の石理紋様や端渓の眼（がん）などのように、石のもつ素質を深く観察するところに、この時代の鑑賞の特質がよくあらわれている。

次に、墨については硯に比べると著書は少ない。しかしやはり潘谷などという墨の名工もあり、その鑑賞もよく行きとどいたものがあらわれている。たとえば、

墨経というのは、ちょうど茶に唐の陸羽の「茶経」があるように、墨について各方面から見た記録を、完全な体制をつくって一部の著述の形式にまとめ上げたものである。製造法、鑑定法、それに関する故事、保存法、作者などについて、整然とした体裁をととのえて作られている。この本が一冊あれば、およそ墨に関することは何でも完全に理解することができるようになっている、文房具の鑑賞法が完成された形式であらわれている一例である。

墨の材料については、松烟墨と油烟の別があり、松烟が古く、油烟はそれよりもおくれていることが普通に説かれている。油烟墨は南唐の李廷珪がつくったのがそのはじめであると説くこともあるが、後人の説であり、たしかにそうかどうかわからない。しかし、蘇易簡の文房四譜に麻子墨というのがある。これは胡麻の油でつくった墨であろう。とすれば宋初には油烟墨があったであろうということが言いうる。おそらくそ

れより以前にもさかのぼるかもしれない。北宋の紹聖のころにできた李孝美の墨譜には、松烟と油烟の二種の製法を記している。宋の晁説之の墨経には松烟墨の製法について述べているが、油烟墨には及んでいない。明の沈継孫の墨法集要は、明初の洪武戊寅三十一年（一三九八）に成った著述であるが、この本には、古法はただ松焼烟を用いる。近代になってはじめて桐油、麻子油を用いて烟をとっているという。そのほかに皂青油、菜子油をもちいるが、桐油がもっとも色がよいという。油煙の起源は区々であるが、唐宋時代に行われていたとしても、それが普及するのは明代になってからと見るべきであろう。

宋代はこういう趣味の専門化した著書が、いろいろな方面にわたって、ほとんど無数といってよいくらいたくさんあらわされた時代である。このほかにも石では杜綰の「石譜」があり、香では洪芻の「香譜」、葉廷珪の「名香譜」、陳敬の「新纂香譜」があり、酒には竇苹の「酒譜」蘇軾の「酒経」朱紘の「酒経」、茶では蔡襄の「茶録」、徽宗皇帝の「大観茶論」などかずかずの小品があり、そのほか、梅、牡丹、芍薬、蘭などの花木に関するものも少なくない。文房を中心とした趣味生活が、文人学者たちによってさらに深く研究をともなって、専門化した著書としてつぎづきにあらわされたのである。ここにもこの時代の深いものの本質に心を潜める特質をうかがうことができる。

宋人の著名な文人学者のなかには、文房具の鑑賞にすぐれた人が多くあらわれた。歴史学や金石学の大家として、また唐宋八家の一人として文学においても名をなした欧陽脩には、「試筆」と「筆説」という短文を集めた随筆集があり、そのなかにも筆硯のことなどがきわめて趣味深く書かれている。（小著、中国書論集参照）。かれはまた「硯録」という硯の専門の本もあらわしている。

かれの門下から出た蘇軾にも、文房具についてしたためた題跋が、その著「東坡題跋」のなかに多数収められている。その一二を拾ってみると、

「余蓄墨数百挺、暇日輙出品試之、終無黒者。其間不過一二可人意、以此知世間佳物自是難得、茶欲其白、墨欲其黒、方求墨時、嫌漆白、方求茶時、嫌雪黒、自是人不会事也」、

「近時士大夫多造墨、墨工亦尽其技、然皆不逮張李古剤、独二谷乱真、蓋亦竊取其形勢而已矣、呉子野出此墨云、是孫準所遺、李承晏真物也、当以色考之、仍以数品比較、乃定真偽耳、紹聖丙子十二月二十一日書、」

「石昌言蓄廷珪墨、不許人磨、或戯之云、子不磨墨。墨当磨子。今、昌言墓木拱矣。而墨故無恙、可以為好事者之戒、」

など、いずれも興味のふかい記事である。このように文人学者の題跋集からも、いろいろと当時の資料を求めることができ、北宋時代の士人の文房具に対する好尚や、製造の方法や品質、また製造者の名工などを知ることができる。

北宋にはもう一人米芾がある。中国における代表的な文人の一人で、書画の収蔵および鑑識にすぐれ、書は晋人の風度を慕うて一家をなし、画もまた新しい手法によって名が聞えた人である。文房具にももちろんいろいろと変った趣味をもっていた。かれは船のなかに書画骨董をもちこみ、それを座右に陳列して、これを賞玩しながらそのなかに起居した。世にこれを米家書画舫とよんだという逸話もある。とくに石を愛好する癖があり、佳い石に出逢うとそれに礼拝をしたというので、米芾拝石という故事もある。この一事からしても、その好尚の尋常ではなかったことが想像される。著述には書史、宝章待訪録のような法書の研究書と画に関しては画史があり、文集は宝晋英光集としてまとめられている。そのほかに海岳名言、海岳題跋のような短文を集めたものがある。文房具関係では評紙帖と硯史がある。かれの石の趣味はこの硯史のなかにおいてよくうかがうことができる。

米芾が所蔵していた有名な硯山がある。陶宗儀の輟耕録に見えている。かれの書斎の名を取って宝晋斎硯山とよばれている。この石はもと南唐李氏の所蔵していたもので、米芾はたえずこれを座右において、愛玩していたものである。その形勢は、峯巒が起伏するさまが、彫琢を仮らないで、天然のままに渾然として形づくられている。竜池は天の雨ふらんとするに逢えば津潤する。少しばかりの水を池中に滴らせておくと、十日ほどたっても竭きることがない。もっとも高い峯を華蓋峯という。その下に月岩があり、翠巒があり、方壇と玉筍があるなど、この石はさまざまの景色をそなえたもので、盆石の妙をつくしている。かれはまた、蟾蜍（ひきがえる）の水注を所蔵していた。これはそのなかに水を満たして硯のかたわらにおいておくと、人力を借らないで、ひとりでに口から泡をふき出し、その泡がこぼれて水が硯の上にしたたる。こうしてこれをくりかえし、腹のなかの水がなくなると止まるという。（小著、文房清玩二参照）。

かれはまた紙についてよく鑑賞の眼を備えている。その著書「書史」のなかにも、古法書の紙絹についてくわしい敍述を加えている。またみずから十紙の説を出した。十紙というのは、福州紙・越陶竹紙・六合紙・無為紙・河北桑皮紙・六合慢麻紙・饒州竹紙・川麻紙・康王紙・冷金紙がそれにあたるらしく、みなそれぞれについて批評をこころみている。これはその筆蹟が法帖に刻されて、評紙帖とよばれている。かれは石にそうであったように、紙においてもよくその本質を深く知ることにつとめていたのである。このような例をみても、宋人が文房の愛玩にいか

にこころをつくしたかがよくわかる。

北宋のおわりの天子、徽宗皇帝は、さきに述べた南唐の李後主に次いでの風流天子で、書画古器物を愛好することにかけては、さらにそれをしのぐものがあった。硯の石材に端渓というのがあるが、これも徽宗がまだ天子の位に就く前に、広東の端州という地方に封ぜられていた、この地の端渓は唐以来、硯の良石として知られていたが、かれがここに来て、さらに良石を発掘させて、立派な端渓石硯をつくらせた。その硯の形式を宣和式とよんでいる。それからのち、端渓が硯のなかの最上品としてますますもてはやされるようになったということである。

宋代は欧陽脩が集古録をあらわして、金石の学問を興起してこのかた、あわせて古器の蒐集鑑賞がようやくさかんになり、その図録もかなり多く刊行されている。薛尚功の「歴代鐘鼎彝器款識法帖」とか、呂大臨の「考古図」（元祐七年、一〇九二）などがあり、徽宗のときにはそういう考古の研究が最高頂に達して、ついにそれが王黼等の撰になる「宣和博古図録」の大著となった。

そのいきおいは南宋にも及んで、乾道元年（一一六五）竜大淵等によって「古玉図譜」が編集刊行された。玉器を集成したものであるが、そのなかにも、玉製の硯、筆管、筆床などのいろいろな文房具がふくまれている。すべて古くからの由緒のあるものばかりである。第二十冊から第二十三冊までを文房部とし、このなかには、硯、筆管、硯山、水丞、水注、水斗、書鎮、書尺、刀筆、貝光などをいろいろと収めている。文房具といっても主要なものは筆硯紙墨をあげるのが普通であるが、そのほかにもこのようにさまざまの器物があり、それが精巧で美しく細工されているのを見ると、いかにその好尚が高まっていたか想像にあまりがある。

宋代は、都が臨安に遷ってからのちも、一般的には学問も文芸も、前代のあとをうけているが、さらにまた次第に深く専門化してゆく傾向をもち、今まで知名の士の間に支持されていた学問文芸が、ひろく無名の人々のあいだに行われるようになる。文房清玩の方面においても、特定の人の専門的な研究のほかに、もう一つ大きい傾向としては、この趣味をよく整理し体系づけて、大きく一つにまとめて考えようとする動きがあらわれる。文房の対象となった一つ一つの趣味が、全体的な観点から見られるようになってくる。その好例が、宋末にあらわされた趙希鵠の洞天清禄集である。

著者の趙希鵠はくわしい伝記のわからない人物であるが、宋の宗室の出身で、慶元年間（一一九五―一二〇〇）に湖南長沙の太守をつとめていたことがあり、淳祐二年（一二四二）には臨安に在ったことがその著書のなかに見えているので、この本の成立もこれからそれほど遠くない

時期にあたるであろうと推定される。ほぼ南宋の末葉と見てよいものである。その内容には、1古琴、2古硯、3古鐘鼎彝器、4怪石、5硯屏6筆格、7水滴、8古翰墨の真蹟、9古今石刻、10、古画、以上の十門に分たれ、それぞれについて鑑別の方法を説いている。これをみると琴とか碑帖、画幅のほかに、硯や古銅器、怪石（盆石）、硯屏、筆格のような文房具をもとりあげていることが注目される。序文をよむと、香茶紙墨のたぐいのすでに譜に記されているものはもうここにくどくどしくは述べないといっているから、このほかに香茶紙墨もその鑑賞の対象になっていたことがわかる。従って文房のなかで鑑賞しうるものはすべて一書に包括して、その部門を分ち総合的な形にとりまとめて、その鑑別の方法をといている。このことは、いいかえれば、文房清玩の趣味が体系化され、一つのものとして全体的にとりあげられるようになったことを示している。これまで、一つ一つの譜録はあったが、これをすべて一書にまとめて体系づけられていることは、おそらくこの著述がはじめであろう。（小著、文房清玩一参照）。

上記とほぼおなじころ、林洪によってあらわされた著書に「山家清事」がある。林洪は宋初の隠栖の詩人として名高い林逋（和靖）の七世の孫と称する。この著述は、山林の士のために、怡養飲饌、起居器服およびその生活における交盟の戒しめなどを摘記したものである。そのなかに梅花紙帳、火打石、山房の三益（菊枕、蒲褥、養和）、詩筒などの、室内の施設や用具などにも及んでいる。さらに鶴の見立てかた、竹の植えかた、花の水揚げの仕方をもといている。要するに、山林に住む仙客の生活方法をえがいて、その施設や用具を説きながらも、その間に文人を山林の士として性格づけている。仙人や道士の生活を基調として、それをさらに文人の美しい趣味と清浄な精神によって高めている（小著、文房清玩一参照）。林洪には別に「山家清供」という食物の趣味の著書もある。わが国では饅頭の元祖として知られている人物である。

宋の唐子西の家蔵古硯銘并序に、「筆之寿以日計、墨之寿以月計、硯之寿以世計也」といっている。筆の寿（よわい）は日を以って計え、墨の寿は月をもって計え、硯の寿は世をもって計えるという。これは筆墨硯の寿命をのべた言葉にすぎないが、この考えの底には、文房具というものが怡養のために愛玩されることを意味するものがある。そしてこれは山家清事のような仙家の思想に本づいていると考えられる。

もう一つ、宋の陳槱に「負喧野録」がある。これは石刻碑帖から書法におよび、さらに筆硯紙墨についてもくわしい記事があり、その品種や製法についての実際を知ることができる。（小著、文房清玩一参照）。

林洪にはもう一つ「文房図説」という著述がある。これは文房具を図示し、それに一つ一つ賛を題している。その賛にはこの文房具を人間に

見立てて、姓名字号をあたえ、その上、官位を授けて、いかにも一人前の人間のように見せかけて、その小伝を記している。さきにかかげた唐の文嵩の四侯伝とか、韓愈の毛穎伝などと同一の方法をとったものであるが、図を示し、内容もよく充実し、整備されているところは、一層進んだものとなっている。文房具もここまでくると、まるでわが子のように、また新しい友だちのように、愛情をもって愛玩されている。その品目は左のとおりである。

	（姓）（官名）	（名）	（字）	（号）
1	毛中書（筆）	述、	君拳、	尽心処士
2	燕正言（墨）	玉、	祖圭、	体玄逸客
3	楮待制（紙）	田、	為良、	剡溪遺老
4	石端明（硯）	甲、	元樸、	岩屋上人
5	水中丞	潛、	仲含、	玉蜍老翁
6	貝光禄（紙みがき）	粲	孺文	潔庵小友
7	石架閣（筆おき）	卓、	汝格、	小山真隠
8	辺都護	鎮、	叔重、	句曲山民
		妥、	元安、	如石静君
9	黎司直	合、	志斉、	木訥老人
		仝、	秀方、	抱槧書生
10	刁吏書（小刀）	剛、	克之、	桂渓野客
11	竺秘閣	馮、	可馮、	無弦居士
12	曹直院	導、	公路、	介軒主人
13	方正字	端、	士直、	悪圓老叟
14	齋司封（剪刀）	敏、	功父、	快閣隠君
15	胡都統	厚、	伯固、	善補疇士

16 印書記　篆、少章、明信公子
17 黄秘書　密、惟謹　斗室隠者
18 槃都承　蔵、利用、通悟先生

元代になってから、元統二年（一三三四）、羅先登によってこの続編があらわされた。それには次の十八種が加えられている。

1 朱検正　丹、伯洪、赤域仙侶　2 木奉使　簡、敬行、漆園傲吏　3 平待制　樹、公立、大隠先生
4 明詔使　光、徳耀、開晦公子　5 房刺史　卷、仲舒、善蔵埜客　6 廉将軍（帙）密、思謹、湘筠老叟
7 高閣学　介、友文、清節処士　8 椶将軍（刷毛）翦、思斉、勇退老夫　9 石鼓院、鎮、子厚、岐山後人
10 利通直（きり）鋭、弥堅、金精山人　11 焦　桐、良材、清音居士（琴）　12 白、玄、君奕、爛柯遷客（碁）
13 莫　鄒、剛卿　豊域隠君（剣）　14 釈　鑑、無隠　圓明上坐（鏡）　15 弓　矢、子勁、翼圃老人（弓矢）
16 葉　嘉、清友、玉川先生（茶器）　17 水　函、子方、介石高士（盆石）　18 商　鼎、師古、香山道人（香炉と卓）

これをみると、書斎の調度品としての文房具の品種の一通りを知ることができる。こういう品々が書斎に陳列された状景がどのようであったか、想像して見るのもよいではないか。のちに、明の顧元慶のあらわした十友図賛もこのような著述の形式と内容を承けている。

宋時代において系統立てられた文房具の趣味は、元時代をへて、つぎの明時代になると、この時代の文化の発達と、好尚の向上にともなって、ますます盛大におもむいてゆき、鑑賞の方法も一層深くくわしくなる。明人には清供の癖があるといわれるように、この時代の特色は、文人の趣味性によってきわだって大きくあらわれる。そしてそれは、個々のものの趣味、文房具の諸器や香茶花木のそれぞれにもくわしい本はあらわされるが、もっともその時代の大勢をよく示しているのは、この文房清玩を総括的にまとめて概説している数種の著書である。

その一つに、明のはじめ、洪武二十一年（一三八八）に曹昭のあらわした「格古要論」がある。これは、古銀器、古画、古墨蹟、古碑法帖、古琴、古硯、珍奇、金鉄、古窯器、古漆器、錦綺、異木、異石、の十三門に分ち、各部門をさらにこまかい条目に分っている。それぞれについて、真贋優劣の鑑識を詳細に論じている。そののち天順三年（一四五九）また増補されて、内容はさらに豊富になっている。

この時代の文房清玩は末葉の万暦年間になって最高頂に達する。万暦十九年（一五九一）高濂によってあらわされた「遵生八牋」はそのもっとも代表的な著述である。この本は、

1　清修妙論牋　　2　四時調摂牋　　3　起居安楽牋　　4　延年却病牋　　5　飲饌服食牋

6　燕閒清賞牋　　7　霊秘丹薬牋　　8　塵外遐挙牋

の八牋に分たれている。第一牋には、道釈二家の格言をあげて養生の道をとき、第二牋には、四季の養生法、第三牋には、怡養のための生活上の諸施設、器具、第四牋には、健康長寿法、第五牋には、飲食物、第六牋には、古器碑帖、文房具などの愛玩品から花木にまでおよび、第七牋には、服薬と処方、第八牋には、歴代の隠逸百人の事蹟をかかげている。すべては修養のために編纂されていることはこの条目だけを見ても明らかである。文房清玩はそういう怡養のための一助となっている。さきに述べた宋の林洪の「山家清事」において、仙家の生活をえがいてそれに文房の施設や諸具がともなっているのと同じことである。この書においても、おわりに隠逸の仙家の事蹟を列挙しているのを見ても、その目標がいずれにあるかということがわかる。

万暦三十四年（一六〇六）に刊行された陳継儒の宝顔堂秘笈に収められている「考槃余事」は、屠隆の編纂したものとされているが、その内容をしらべてみると、上記の格古要論と遵生八牋とに本づいて、その文を借りて作りあげたもので、屠隆の名を題してはいるが、実際は屠隆が筆をとってあらわした著述ではなく、おそらく書賈が屠隆の名声に託して、その名を借りて編纂したものと考えられる。その内容は

1　書箋、2　帖箋、3　画箋、4　紙箋、5　墨箋、6　筆箋、7　硯箋、8　琴箋、9　香箋、10　茶箋、11　盆玩箋、12　魚鶴箋、13　山斎箋

14　起居器服箋、15　文房器具箋、16　遊具箋

以上の十六箋から成っている。文人生活のあらゆる面をとりあげて、よく粋をえらび、まとまった体系を立てている点では、この種の著述のなかでも出色のものであり、古くからわが国においても愛読されたものである。（小著、文房清玩二参照）。

この本では、文房器具箋のなかに文房具を列挙している。それには、

筆格、硯山、筆牀、筆屏、筆筒、筆船、筆洗、筆覘、水中丞、水注、硯匣、墨匣、印章、図書匣、印色池、糊斗、蠟斗、鎮紙、圧尺、秘閣、貝光、甎甋、裁刀、剪刀、途利、書灯、香橡盤、布泉、鈎、簫、摩、如意、詩筒と葵箋、韻牌、五岳図、花尊、鐘、磬、禅灯、数珠、鉢、番

経、鏡、軒轅鏡、剣

以上四十五種をあげている。文房具に関しては、これでほとんどが備わっているであろう。こういうものの一つ一つについて、どのようなものがよいかを鑑識しているわけであり、文房具についても随分と微細な趣味にわたっていることが認められる。

明末になるといよいよ趣味が洗練されていった。文徴明の曽孫にあたる文震亨の「長物志」はそのもっともよいものに属する。内容は、

室庐、花木、水石、禽魚、書画、几榻、器具、衣飾、舟車、位置、蔬果、香茗

以上十二章に分れている。さすがにこの時代の代表的な文人の家の出身だけあって、内容はよく選択され整理され、好尚は洗練され、文章もよい。明代の文人のもっとも理想的な趣味生活のすがたを知るにはこの本が最適である。はじめの室庐の序説に、

「居山水間者為上、村居次之、郊居又次之、吾儕縦不能栖巖止谷、追綺園之蹤、而混跡廛市、要須門底雅潔、室庐清規、亭台具曠士之懐、齋閣有幽人之致、又当種佳木怪籬、陳金石図書、令居之者忘老、寓之者忘帰、遊之者忘倦、蘊隆則颯然而寒、凛冽則煦然而燠、若徒侈土木、尚丹雘、真同桎梏樊檻而已、志室庐第一、」

とのべて、門、階、牕、欄干、照壁、堂、山齋、丈室、仏堂、橋、茶寮、琴室、浴室、街径庭除、樓閣、台、総論、

の項目に分って、その構想を説いている。住居山水を理想とするが、それのかなわぬときは、せめて門庭は雅潔で室庐は清靚であいたいという。俗世間から脱して清浄な山水の境に入ることを旨としている。その一つ一つの趣味の清素さには取るべきところがある。心を清め、奢侈を離れ、欲を洗いおとした境地に入った清純さと、それにふさわしい高い趣味性には及ぶものがないと云ってよい。

巻七器具の章に文房具のたぐいを収めている。その序説に、

「古人製器尚用、不惜所費、故制作極備、非若後人苟且、上至鐘鼎刀剣盤匜之属、下至除糞側理、皆以精良為楽、匪徒銘金石尚欵識而已、今人見聞不広、又習見時世所尚、遂至雅俗莫辨、更有専事絢麗、目不識古、軒窗几案、毫無韻事、而侈言陳設、未之敢軽許也、志器具第七、」

とあり、

香炉、香合、隔火、匙筋、筋瓶、袖炉、手炉、香筒（以上香道具）。

筆格、筆牀、筆屏、筆筒、筆船、筆洗、筆覘、水中丞、水注、糊斗、蠟斗、鎮紙、圧尺、秘閣、貝光、裁刀、剪刀、書灯、灯、鏡、鈎、束

腰、禅灯、香櫞盤、如意、麈、銭、瓢、鉢、花瓶、鐘磬、杖、坐墩、坐団、数珠、番経、扇墜、枕、簟、琴、琴台、研、筆、墨、紙、剣、印章、文具、梳具、銅玉、雕刻、窯器、総論、

をあげている。器物では古人の風雅な作をたっとび、現在の華美な通俗なものをしりぞける意を述べている。品種は考槃余事と近いが全般的にこの本の方が趣味は高い。

明の末葉の張応文が撰び、その子張丑（謙徳）が潤色した清秘蔵も、文房清玩の鑑識のための参考書である、考槃余事などとともに古くわが国においても重宝されている著書である。

明代ではこのように文人趣味がもっともさかんに行われたが、文学作品の上においても、小品文がつくられて、人々にうけ入れられた。公安派の三袁、すなわち宗道、宏道、中道の三人兄弟やその知友たちのつくった作品を文房小品とよんでいる。この趣旨は文人の文房生活から出ている。性霊をたっとび、妙悟を主とするかれらの説は、みな清素でまた情性のみちあふれた作をつくっている。

袁中郎はとくに、いけばなを説いて「瓶史」をあらわした。これは、単にいけばなの技法をとくだけものではなく、その高い精神を文人の立場からよく発揚している。この時代の代表的な作品といってよい。（小著、文房清玩三参照）。張丑の「瓶花譜」もいけばなについての好い著述である。

明時代の文房清玩の特色は、上記の格古要論、遵生八牋、考槃余事、長物志などにもっともよくあらわれている。ひろく古人の説をとり入れて、それを一つの体裁にまとめ、さらにこの時代の好尚を加える方法をとって、全体からまた一種の意図をあらわしている。この時代の書画なども同様で、古人をひろく学んだ上に、またその人自身のものを打ち出しているのが一般的な傾向である。書道では法帖を集めた集帖の形式のものがきわめて多く現われたのも、このような広い好古趣味から出て、鑑賞を深めようとするにある。その裏付けとして、この時代の社会の安定と経済的な伸張があることも、その背後の力として大きかったことが、又別の面からも考えられる。

一般的な文房書に対して、個々の専門的な文房小品は宋代に比べると少ないが、しかし、その趣味はますます広く、また深められている。小品でもっとも多いのは、この時代に大流行した茶の関係のものである。これは宋代にも劣らぬくらいの盛況である。とくに新しく起った煎茶の波にのって、多くの著述が出現している。陸樹声の「茶寮記」田藝衡の「煮泉小品」、馮時可の「茶録」、屠隆の「茶箋」、屠本畯の「茗笈」

許次紓の「茶疏」、顧元慶の「茶譜」張丑の「茶経」、茅一相の「茶具図賛」など一々数えるいとまがないくらいである。

文房具では、墨譜がつくられたことが注目される。墨の名工は、宋に潘谷があり、元に朱萬初があるが、明代になると程君房、方于魯など、程、方両家の名工が多くあらわれた。墨の製法もいよいよ巧妙になり、墨譜を作って版本として愛賞する方法が行われるようになった。

墨譜というのはただ墨の外形とその装飾した意匠や銘文を示すことが出来るだけで、墨の実質は表わしにくいけれども、墨の商標の役目を果すもので、墨譜と実物を照合することによって参考に役立っところは少くない。

方于魯に「方氏墨譜」があり程大約に「程氏墨苑」がある。程氏の墨譜にはキリストの像がはいっている部分があるので、禁書となり、伝本の数がきわめて少めい。このほか方瑞生の「墨海」がある。この本は墨についてのいろいろな故事を説明した図が多く、内容が豊富である。

墨譜のなかには多くは名墨をのせているが、今日なお伝存して名を知られているものもある。明墨では宣徳年製のものがよいといわれる。「竜香御墨」というのは、その宣徳年製の名品として知られるものである。方于魯の墨譜に「瑞元妙品」というのがある。湯川七石翁の所蔵にこれがあった。このほか方、程の製墨は今なお所蔵されるものを時に見ることがある。江戸の幕末の書家市河米庵の愛蔵品に「歙藩嘉客墨」というのがある。これも明墨で名のあるもののようである。製墨法を集成した著述に、沈継孫の「墨法集要」がある。洪武三十一年（一三九八）にあらわされた。図解による詳細な記事があり、参考になるところが多い。

墨に墨譜があるように、紙には箋譜がある。胡正言の撰した「十竹斎箋譜」は崇頓十四年（一六四四）に成ったもので、精巧をきわめた色刷りの美しい版本である。民国二十三年（一九三四）十二月、魯迅が覆刻した本がある。胡正言にはまた別に「十竹斎書画譜」があり、これも美事な色刷の版本で、蔵書家に喜ばれる善本である。箋譜とともに明代の文人の好尚はこれによってもよくうかがうことができる。清朝になって翁松年が、「蘿軒変古箋譜」をあらわしているのも、胡氏の刊本を承けるものである。

建築庭園に関するものに、崇禎四年（一六三）の計成の撰した園冶がある。窓の格子の意匠を多数図示しているのなどは、とくに注目される。また、金魚の飼い方を述べた張丑の硃砂魚譜も明人の趣味のゆたかさを示す佳い小品である。

また、書画の収蔵家で名高い項元汴の「歴代名磁図譜」なども、磁製の花瓶や杯、灯器などを図示している。明人の工芸に対する好尚の非凡であったことをよく知ることができる。一九〇八年オックスフォードにて英訳本が刊行されている。

明代では専門的な文房書は宋代ほど多くは残っていないが、また古今の文房の小品をあつめた叢書が多くつくられた。群芳清玩は明末の李璵（恵時）が編集し、毛氏汲古閣で刊行したものである。その内容は次のとおりである。

梁、虞荔　「鼎録」　梁、江淹　「刀剣録」
宋、米芾　「硯史」　宋、湯垕　「画鑑」
宋、杜綰　「石譜」　明、袁宏道　「瓶史」
明、王思任　「奕律」　明、張応文　「蘭譜」
明、屠本畯　「茗笈」　明、毛晋　「香国」附「名香譜」
明、闕名　「採菊雑詠」附「菊譜」　明、弋汕　「蝶儿譜」

附編

宋、范成大　「梅譜」　宋、欧陽脩　「洛陽牡丹記」
宋、王観　「芍薬譜」　宋、陳思　「海棠譜」
清、方絢　「貫月査」　清、方絢　「采蓮船」
宋、楊光咎（又云方絢撰）「響櫟譜」

また、茅一相の輯した欣賞編（正続）がある。その内容は次のとおりである。

宋、王厚之　「古玉図」、「古印譜」　宋、陳摶　「希夷坐功図」
古杭、高濂　「八段錦図」　宋、林洪　「文房図賛」
元、羅先登　「続文房図賛」　明、顧元慶　「十友図賛」
宋、審安老人　「茶具図賛」　宋、黄長睿　「燕儿図」
明、屠隆　「遊具図」　明、汪汝謙　「画舫約」
（明、沈仕）　「硯譜」　宋、晁氏　「墨経」
唐、司空図　「詩品」　明、王世貞　「詞評」

明、王世貞　「曲藻」　宋、張玉田（炎）「楽府指迷」
唐、武則天　「廻文図」　明、田芸衡　「蘇蕙蘭図」「陽関三畳」以下略

このように文房小品の粋を集めた著書は好んで行われた。その古今にわたる名著をよく精選して編集しているところは、この時代のディレッタンティズムをよく表している。

明末に出た胡文煥という人も、文房趣味が豊かで、「百名家書」という叢書を編集している。そのなかには、茶経、茶録、東渓試茶録、茶具図賛、文房清事、文房図賛、続文房図賛、山房十友図賛、洞天清禄、香譜、山家清事などいろいろな文房書を集めている。その自ら撰した「文房清事」や、また「墨娥小録」〔胡文煥原撰、清、学圃山農校刊、光緒十年（一八八四）刊〕を見ると、実際の製法の技術について解説をしている。たとえば、碑文のかきかた、拓本のとりかた、紙の加工のしかたなどいろいろな方法が記されているのはめずらしい。文房具を解説したものは多いが、その製造の工程や技法に及んでいるものはきわめて稀であり、こういう書物は、その点では貴重な価値をもっている。

このほかにも居家必用（至元己卯友于書堂刊本）、居家必用事類全集（明嘉靖覆元本）、居家必備（明隻祐序九十八種本、）等、明代に行われた叢書の中にはかなり多くの文房小品が収められている。

董其昌に骨董十三説という文章がある。骨董に対する見解をのべた小著である。それには、骨董は今の玩物である。今の骨董は古人の用物（実用品）である。骨董の貴ぶべきところはその長寿にある。といい。また骨董には逸品があるといってその逸品を掘り出す喜びをのべ、骨董を玩べば却病延年の助けがあるという。美術品の愛玩は心身の怡養に役立つものと見ている。文房具の愛玩はあそびではあるが、そのなかにも余徳があることをのべている。その思想的な背景は、宋以来の考えとおなじく、道家の考えかたから出ているものを感ぜしめる。とにかく明一代は文房清玩趣味の最高頂に達したときであり、この時代の文化のなかでその占める位置はきわめて高く、唐宋からつづいてきた文人の性格が、もっともつよく反映され、完成された一つの体系的な形をつくり上げているのはこの時代である。

清代になると、政治の体制も一変し、文化のすがたも、もはや前朝とは大きくはなれてしまう。新しく学問が勃興して、実証を主とする考証学におもむく。明人の清供の趣味はもはや主要な位地におかれなくなる。しかし、清初にはなお明代の余勢があり、文人型の人物もあらわれている。明末清初に出た李漁（笠翁）は戯曲小説を好み、趣味はゆたかに、芸術的才能にも秀でた。その著閑情偶寄は、内容は詞曲、演習、声容、

居室、器玩、飲饌、種植、頤養の八章に分たれ、この洒脱な筆致をもって各部門において文人の趣味教養の道をといている。なかでも居室器玩の二章はその起居する室内の装飾や施設をとりあげて、陳腐を去り清新な創意をたっとんで、倹朴な生活のなかから堅実で簡素な美しさを見出すことを力説している。明人の陥りがちな通俗性から脱皮して、創造の世界に生きたところは、歴代の文人のなかでもめずらしい存在である。

この人が出てのちは、もうほとんどこの種の著述はあらわれなかった。わずかに陳涅子のあらわした秘伝花鏡は、園芸を主としているが、ひろく文房趣味にも及んでいる。けれども明人を襲うばかりで新意にともしい。沈復の浮生六記はずっとおくれて嘉慶十三年（一八〇八）に成ったがそのなかには、文房清玩に対するこまやかな愛情が切々とえがかれて、花木園庭などに寄せたうつくしい情藻が、清朝人としてはめずらしいやさしい筆で述べられている。これをよむとこの時代にも明人の文人のこころを承けている人があることが知られる。

しかし、大勢はいかんともしがたい。この時代は一般的には明までの文化を整理し、学問的に新しく築き上げた時期である。乾隆の勅撰にかかる西清古鑑や西清硯譜を見れば、それが国家の事業として歴朝の名器佳硯を網羅しつくし、厳密に遺漏なく遂行されていることが感じとられるが、やさしい文人の趣味性はあまり大きくはあらわれていない。

この時代の文房の研究書は、長い王朝だけにかなり多い、学問のかたわら撰述された小品にも見るべきものがある。

硯に例をとるならば、明の万暦年間に端渓の水岩が開掘されてのち、端渓硯はますます珍重されるようになり、清朝に入ると、乾隆のころから大西洞が開掘される。この坑の石は、いままでの眼とか青花という石理紋様のほかに、魚脳凍、氷紋、蕉葉白、天青、火捺、虫蛙などのいろいろな石理紋様を備えたものがあらわれてくる。こうして大西洞の端渓が世にあらわれるころには、一層その度を深めていったのである。しかし、端渓の採掘は勅命によって行っていたので、民間では容易に手にいらなかった状態である。硯の名品の多くは内府に入り、西清硯譜に収められた。しかし、これ以外にもなお愛好者は絶えず。硯に関する硯譜とか研究者のたぐいがきわめて多い。

高鳳翰「硯史」（道光中、王相刻拓本）、紀均「閲微草堂硯譜」唐秉鈞「文房肆攷」、呉縄年「端渓硯志」（乾隆二十二年、一七五七）、何伝瑤「宝硯堂硯弁」（道光十年一八三〇）、呉蘭修「端渓硯史」、銭朝鼎「水抗石記」、曹溶「硯録」、施潤章「硯林拾遺」、朱彝尊「説硯」、高兆「端渓硯石考」、計楠「端渓硯坑考」、同「石隠硯談」、同「墨余贅稿」、李兆洛「端渓硯坑記」など多くの著書がある。

硯の工人にも多くの名工の名が伝えられている。端渓老坑の佳石でなければ作らなかったという名人肌の顧二娘のような人物もある。近刊の

林柏寿氏の蘭千山館硯譜（民国五十五年刊）は宋元明清の諸作を収めているが、清人の名家の刻銘のあるものが大半を占め、清代における硯の好尚を玩味することができる。日本で刊行された硯の本にも、唐硯を収めたものが多数あり、石希聰の「和漢硯譜」（寛政七年一七九五）をはじめとして、湯川玄洋「精華硯譜」、谷上隆介「宝硯斎硯譜」第一、二、三冊などから近刊の諸家の著書にいたるまできわめて多く、また実際の蒐集品について見ることもできる。私もかって大谷禿庵上人の旧蔵の硯について「梅華堂硯譜」を作ったことがある。（大谷学報）。このなかにも清人の刻銘のものが多数ふくまれていて、硯銘も文学作品として見られるべきであること、また、その刻書は、篆刻における側欵とおなじく、この刻法の美をも鑑賞できることを特に注意しなければならない。

硯は本来、実用を主とするものであるが、唐宋以来、その石材としてのうつくしさが鑑賞の眼目となり、さらにそれを形づくる姿のおもしろさ、石理紋様、雕文などいろいろの鑑賞の見どころが加わってきた。後世その鑑賞愛玩の中心となった端渓には眼（がん）のあるのを証拠とし、その眼にも活眼あり、死眼あり、石質は鋒鋩（ほうぼう）の立っているのをよいとし、温、潤、柔、嫩、細、膩、潔、美の八徳を備えていなければならないとするなど、石材だけについてもくわしい観点がのぞまれる。さらにそれを使用するときの墨との関係、すなわち澆墨とか著墨の条件、また所蔵者はこれを愛玩して、その面に題銘を刻したりもする。その銘文と刻銘の書のうつくしさも鑑賞家の見逃さぬところである。それにともなってまた、水滴とか墨牀とか筆格などという多種類の文房具とのとりあわせもいろいろと複雑に考慮される。このように鑑賞の内容もふかく、巾もひろく、歴史もあり文学もあるという特色があって、ながい歴史のあいだにおいて絶えることなく鑑賞されてきて、文房具のなかの王者のような地位を占めているのである。その蒐集にも一人で数百枚に及ぶというのはめずらしくなく、文房具のなかでもっとも癖（へき）の甚しいものということができよう。筆には梁同書の「筆史」があり、筆の種類をよく集めている。

墨には汪近聖の「墨薮」がある。色刷の美本で、乾隆御墨などのうつくしい意匠を実物のままに見ることができる。

中国の歴史をたどって考えてみると、文房の器具を愛玩することは、すでに遠く漢魏晋にさかのぼることができるが、それが文房清玩ということばで表現することができるのは、文人が成立してからである。文人は画においては唐の王維にその源を求めたように、その人の教養や趣味また生活環境の条件の上に立つものであり、その条件にかなった人物のあらわれることにより、次第に展開していったと考えられる。五代の李煜や宋初の林和靖のころには、文房すなわち書斎を中心とする生活文化が形づくられていたとおもう。そののち宋代の文化が文人学者の書斎を

中心として、ようやく成熟して、書斎文化の向上や小品文の盛行にともなって、この時代の独特の文房清玩が成立した。南宋末のころにはそれが体系化された著書として、趙希鵠の洞天清禄集によってまとめられた。元をへて明代入にると、宋の文房清玩を承けて、さらにこれを集成するとともに体系化し、この時代の文人趣味によってよく洗錬を加え、ここにまた文房清玩の第二の高潮期を迎えた。清代はこれを承けたが、明人の清供の趣味の高さにはついに及ぶことはできなかった。

文房清玩は思想的には儒、仏、道いずれの要素をもっているが、そのもっとも強い色彩をなしているのは道家の思想であり、山林にすむ仙家にその理想郷が求められている。そのこころはつねに清浄であり、いずれの場合にも、いずれの文人にも共通して感じられるところは、この清浄のこころである。

かれらの好尚は、それと同時に、俗に対して文雅であることが心須の条件である。色合いはさまざまであるが、文雅であることには、いずれの場合、いずれの文人にも、これまた相通ずる特性となっている。

遊びのように見えるが、そこには文人としての高い精神が宿っていることに、価値を見出すことができるものである。文人の高い精神があってこそ、文房清玩はその生命をたもつことができるのである。